

## 近代日本の教育とキリスト教(7)

—1880年代におけるキリスト教徒の教育活動<2>—  
大学設立構想

平沢 信康\*

### Christianity in Modern Japanese Education (7)

— Christian Educational activities in the 1880's <2> —

Nobuyasu HIRASAWA\*

#### Abstract

Confucianism gradually became dominant, especially in the moral educational policy of the Meiji Government, in the 1880s. At the same time, however, Westernization was still strong in Japan in those days. Even the Government carried out Westernized policies to show the Western manners of Japanese society to Western countries (Rokumeikan Age).

New Christian sects were added, and many missionaries came from overseas to Japan.

In this decade, Christianity became more and more popular in Japan. Many mission schools were founded by missionaries. Japanese Christians also established private schools.

Some missionaries organized universities to rival the only major governmental university (The Imperial University = Teikoku Daigaku). Joseph Hardy Neeshima, one of the most famous Japanese Christians, planned the foundation of Doshisha University.

This paper describes the Christian educational activities in the age of growing nationalism, especially the foundation of Christian universities in 1880s.

**KEY WORDS:** *Modern Japanese Education, Christianity, Higher Education*

#### 1 はじめに

1880 (明治13)年12月、政府は太政官布告59号で「教育令改正」を打ち出し、学校の設置・廃止に対する監督権を確保して「全国ノ教育事務」すべてを国家統制におくこととした。そのため、従来の「高等ナル普通学科ヲ授クル所」であった私立学校は、各種学校として取り扱われることとなった。それをより明確にした「中学校教則大綱」が

翌年7月、布達第28号を以て発せられ、学課目および毎週授業時間数にいたるまで細かく規定された。さらに1886 (明治19)年4月の勅令第15号「中学校令」により高等中学校は官立とされ、尋常中学校のみ公私立も許されることとなった。

こうした教育政策の転換から、中等教育レベルのキリスト教学校は、各種学校に甘んじなければならなくなった。しかし高等教育については、学制期にひきつづき制度的な混沌状態が続いてお

\* 鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

り、この時期には、さまざまな実験が許され、試行錯誤が行われた。とりわけ私学にとって、1886年までの十数年間は、全く自由な時代であった。教育令においても「何ノ学校ヲ論セス各人皆之ヲ設置スルコトヲ得」（第8条）るとされた。この間、府県にも私人にも、独自の理念のもとに、大学を含む高等教育機関を創設していく可能性が制度的に開かれていた。

80年代初頭、比較的好意的にみられていたキリスト教は、一方で激しい圧迫を加えられたものの、その後まもなく欧化政策に支えられて、再び活況を呈する。キリスト教敵視政策やキリスト教を敬遠し警戒する一般の風潮はやわらぎ、逆にキリスト教に対して世を挙げて歓迎する向きへと変わった。各地の伝道は異常なほどの成果を挙げ、教会堂は聴衆に満ち、入信する者が後を絶たなかった。1883（明治16）年5月、東京で開かれた第3回日本基督教信徒大親睦会は歴史的な盛況をみせ、「我が国が基督教国となるのは十五年を出でまい」と大言壮語するほどの確信が信徒の間にみなぎったのも不自然ではなかった。この年、前年に東京大学助教授となった井上哲次郎が「耶蘇教辨惑序」を『東洋学芸雑誌』に発表してキリスト教を攻撃したが、東京大学の指導的な学者であり反キリスト教論者の雄と目された加藤弘之や外山正一までもがキリスト教歓迎の論陣を張った。<sup>1)</sup>

世は欧化の時代であった。しかし政府の方針に関するかぎり、欧化は必ずしも目的ではなく、国家の存立と発展のための手段であり、列強に追いつくために欠くことができない方法であった。ともあれ、欧化主義の高揚は、大学設立をめざすキリスト教勢力にとって追い風となった。

1885（明治18）年、第1次伊藤内閣で初代文部大臣に就任した森有礼は、明治日本の官立教育に関する、いわば総設計師となった。薩英戦争で薩摩が敗れたとき、彼は薩摩藩に属する十代の青年であったが、まもなく他の春秋に富む青年とともに、イギリスに派遣され、後に外交畑を歩んだ。文教行政の最高責任者の地位について森は、彼自身の青写真を実現するため国家主義的な教育政策を断行した。彼は、後のどの文部大臣と比較して

も、もっとも果敢な革新主義者であり、必要に応じて西洋の文化を摂取する点でも、驚くほど徹底していた。<sup>2)</sup>

英国留学中、人の導きによってアメリカにわたり、ハリスとよばれるキリスト教神秘主義者の教えを受けた森有礼は、キリスト教的な信仰をもつ人物であり、明六社の社長をつとめるなど、若き日には前衛的な啓蒙主義的人物であった。しかし、文部大臣になった後の彼は、諸学校令の公布を中心に国家統制を強化する方向で、日本の教育体制を確立した。

学校令の一つである帝国大学令の公布（86年3月2日）により、東京大学（77年創立）に各省庁所管の高等教育機関が統合され、日本で唯一の本格的な総合大学が設立された。それは、欧米先進諸国における伝統的な有名大学とは起源を異にする、政府主導による実学主義的な大学創設であった。キャッチ・アップ型の近代化を急務とする明治政府は、エリート人材養成を帝国大学に担わせた。

高等教育への進出の必要性を感じていたキリスト教徒たちのあいだには、官立大学に対する対抗意識もはたらき、キリスト教主義の大学を設立する構想が生まれていた。1880年代にはいると、プロテスタント系ミッションによって築地大学校と立教大学校が誕生し、新島襄により同志社大学の設立が構想された。それらを主導した人びとの胸には、国家主義や実利的功利主義的傾向に対抗して高等教育を創出しようとする思想的な動機と理想がひかえていた。これらの学校は、大学（校）と称したものの、設立当時は小規模なものにすぎなかった。が、その後、大きく発展し、今日、有名私学として存在感のある大学となっているのは周知の通りである。

反対に、官立の学校体系が整備されるなか、時代からその存在を消していった発芽期のキリスト教系高等教育機関もあった。例えば、津田仙が東京麻布に設立した学農社は、80年代初頭に至ると財政困難に陥り、かつまた優秀な人材が官立学校へ進学する事態が重なり、閉校を余儀なくされる。完備した官立の駒場農事修学場や札幌農学校が開

設されたため、津田は啓蒙的役割は終えたとして、83年12月、学農社を解散した。キリスト教の精神を土台として欧米の新しい農業知識と技術を導入し、教育を通じて国家をその基本から改造しようとした理念性の強いこの学校も、挫折への道を歩んだ。<sup>3)</sup>

本稿は、成長発展の道をたどった上記の3大学、すなわち、築地大学校と立教大学校、それに新高島襄による同志社大学設立運動に関して、以下、事例ごとに経緯と背景を記述する。

## 2 大学(校)の設立と構想

### 1) 築地大学校から明治学院へ

米国オランダ改革派教会、米国長老教会、スコットランド一致長老教会の3ミッションは、1877年、日本宣教に当たるため合同して日本基督一致教会(日本基督教会)を組織し、その3ミッションの監理下に東京一致神学校を東京築地明石町に設立していた。この学校の目的は日本人教職者を養成することにあり、教授・講師は3ミッション選出の宣教師があたった。

東京一致神学校では当初、改革派のアメルマンが年長のゆえもあって校長格であったが、82年頃からは、3ミッション合同に重要な役割を果たした米国長老教会派遣のインブリーが中心となって神学校の充実をめざす改革を推進した。彼は教授として新約釈義、キリスト伝を担当した。同教会宣教師のノックス(Knox, George William 1853. 8. 11-1912. 4. 25)もこの学校で神学と説教を教えた。牧師の子としてニューヨークに生まれた彼は、ハミルトン・カレッジを経て、77年オーバン神学校を卒業して来日し、横浜に住み住吉町(横浜指路)教会の仮牧師をつとめるかたわら、ヘボン塾での教育に当たっていた。

ヘボン塾(バラ学校)は、東京一致神学校の開設に伴い、神学校に転ずる者が生じ、またバラの病気のためもあって経営が困難となった。そのため、長老教会ミッションでは、東京に男子のための学校を新設する計画が建てられた。80年4月、ヘボン塾は東京築地明石町7番の新築校舎に移さ

れ、同塾の移転にともなってノックスも東京に移った。同年9月15日、「築地大学校」と称する学校が創立され、それとともにヘボン塾の生徒の大部分が転入した。

築地大学校の校舎は2階建てで、1階には4つの講堂と書籍縦覧所などがあり、そのほか70名を収容する部屋があった。開校時の学生数は45名であったが、翌年には132名の学生を擁した。学監は英語を教えたアレキサンダー、T. T.、教授はインブリー、W. M.、心理学と史学を担当したマコウリー、J.、田村直臣らであった。学科は英学科(予科3年、本科3年)と漢学科に分かれ、講義は原則として英語、科目はリベラル・アーツとキリスト教関係であった。

校長のバラ(Ballagh, John Craig)にちなんでバラ(波羅)大学校とも呼ばれたこの学校づくりは、官立の東京大学を意識し、それに劣らぬ真の伝道的福音的なキリスト教大学をつくろうという気概に基づく企図であった。これは改革派の人たちから出されたアイデアであったと考えられている。<sup>4)</sup>

その後、さらに統合と再編が重ねられ、明治学院が誕生する。

横浜の米国オランダ改革派教会が経営する先志学校は一時中断されていたが、ミッションの強い意志により、日本での教師経験のあるワイコフが81年に再来日して再開された。彼は物理化学・英文学・英語学などを担当した。優秀な生徒が集まり、学校経営は軌道に乗ったが、長老教会との伝道・教育の合同方針により、83年9月、先志学校は築地大学校と合併して東京一致英和学校となった。プロテスタント主義による中・高等教育をめざしたこの学校は、翌年、生徒数が70-80名と増え、東京神田淡路町に予科を開設して英和予備校と称した。

日本の近代化が進み、官立学校が整備されるなか、ミッションとしても共同経営の教育機関の合理化と教育内容のレヴェル・アップの必要を認めざるをえなかった。86年、東京一致英和学校・英和予備校と東京一致神学校との二つの流れを統合して、一つの大きなキリスト教主義大学を設立す

ることが構想された。荏原郡白金村玉縄台（現・東京都港区白金台）に約1万坪の土地が購入され、87（明治20）年1月22日、校舎が建設された。同年9月、校名を新たに開校した「明治学院」は、初め普通学部のみでスタートしたが、89年には、東京一致神学校が移って明治学院神学部となった。<sup>5)</sup>

明治学院創立時に理事員と神学部教授を兼任したフルベッキが88年に理事長となり、学院の教育経営に参画したヘボンが、初代総理に就任（89年から91年まで在任）した。82年から旧約聖書翻訳委員長としてフルベッキやファイソンと協力して、旧約聖書の大部分を訳し87年に完成させたヘボンは、『和英語林集成』第3版の著作権を丸善商社に譲って得た2000ドルを明治学院に寄付し、これによってヘボン館が建設された。

白金校地の購入などの設立業務を担当したのは、東京一致神学校出身の井深梶之助であった。80年に母校の助教授となり宣教師などの著作の翻訳を多数手がけていた彼は、86年、明治学院創立理事員会で日本人側理事員に選ばれ、その後、理事員会議長、87年に教授となり、89年にはヘボン総理のもとで副総理に就任している。

明治学院では、米国長老教会外国伝道局から派遣された宣教師たちが教授として多数活躍している。

東京一致英和学校で数学を教えていたバラは、神田淡路町に設立された英和予備校でも教鞭を執っていたが、明治学院の普通部教授となり、数学・星学（天文学）・簿記学を担当し、理事員もつとめた。ノックスは神学部の教授として、弁証論・説教・牧会学を担当した（帝国大学の哲学科講師としても哲学と倫理を教えた）。東京一致英和学校に野球部を創設したプリンストン大学出身のマクネアは、論理学・経済学・歴史学を教えた。タイでの伝道経験をもつマコウリーは、東京一致英和学校の教授として心理学と史学を担当し、明治学院では普通学部の教授となった。中国で伝道と外交に活躍し東京の開成学校の教師をしたことがあるマッカーティも、島崎藤村らを教えた。

なかでもランディス（Landis, Henry Mohr

1857.3.9-1921.9.7）は、英語はもとよりラテン語・ギリシャ語・フランス語・ドイツ語を自由に駆使して講義し、戸川秋骨や島崎藤村といった俊才をはじめ、多くの学生の向学心を刺激した。米国ペンシルヴェニア州バークス郡コレブルックデールに生まれたランディスは、75年にキーストン師範学校を卒業して5年間公立学校で教鞭をとった後、81年、プリンストン大学に入学して哲学を専攻した。卒業後、ベルリン大学に遊学、帰国後、プリンストン大学神学部に進み、88年に卒業して、同年9月、来日した。建築にも興味を持ち、明治学院の建物の多くに関係した。

スコットランド一致長老教会は、86年からマクラレンの後任として東京一致神学校教授に就任し旧約聖書と聖經文学を担当したワデルが、同派の代表として引き続き理事員・神学部教授の立場で明治学院に関係した。アイルランド出身で、中国とスペインでの伝道体験をもち、築地大学校で教えた経験も有する人物である。

江戸赤坂に生まれ維新の変革期に徳川家に従って静岡藩に出仕し、その後アメリカで学んだ経歴をもつ大儀見元一郎が、麴町日本基督一致教会を牧するかわら、84年から91年にかけて東京一致神学校と明治学院で教えている。71年に森有礼一行に加わり渡米（勝海舟の援助によるといわれる）した彼は、ホープ・カレッジ学長フェルプスの好意により、ミシガン州ハートランド大学予科に同年10月入学、翌年6月同地のホープ教会で受洗し、79年に卒業、その後、プリンストン神学校を経てニューブランズウィック神学校に学び、82年に卒業し、改革派教会オールバニー中会で按手札を受けて帰国した。

英学者・石本三十郎（1862.12.23-1895.11.2）は、87年に理事員と普通学部の教授となり、神学部講師も兼ねた。彼の英語力は在校生の島崎藤村も絶賛したほど拔群であったといわれる。肥前国大村に生まれた彼は、熊野与・雄七父子の薫陶を受け、熊野一家とともに横浜に移り、1875年ヘボン塾に入塾、15歳の時にジェイムズ・バラより受洗した。石本と服部綾雄とは築地大学校の第一期生であり、82年に卒業した後、同校で教えていた。

最初期の明治学院の学生の中に、熊本県玉名郡岩崎村の出身の戸川秋骨（本名・明三，1871.2.7-1939.7.9）がいる。大阪中学に通い、叔父から漢訳聖書を、キリスト教信者から英学を学んだ彼は、88年、明治学院普通部本科2年に編入された。戸川は、長野県出身で同級の島崎藤村（本名・春樹，1872.3.25-1943.8.22）や、遅れて入った馬場弧蝶らと『甲乙雑誌』を発刊した。

多くの優秀な外国人と日本人の教師をそろえて、清新な気風にあふれた明治学院には、のちに有名な文学者や英文学者となる当時のすぐれた文学青年たちが集い、切磋琢磨し合い、文才の面で頭角をあらわしていた。

## 2) 立教大学の設立

立教学校では、宣教ならびに教会・学校建築に有能な人物を求めていたウィリアムズ主教の要請に応じて、ガーディナー（Gardiner, James McDonald 1857.5.22-1925.11.25）が80年10月に来日し校長に就任する。米国セントルイス市生まれの彼は、ハーヴァード大学を卒業した建築家・教育家で、立教学校では化学と英文学を教えた。この学校の第1回卒業生で周防山口藩士の家に生まれた貫元介（1851.9.29-90.3.31）が、ガーディナー校長（80-82在任）を補佐して運営に当たった。

また、アメリカに帰国したブランシェーとクーパーの日本伝道報告を聞いて宣教師を志願したマキム（McKim, John 1852.7.17-1936.4.4）が、米国聖公会から派遣され、80年3月1日、妻を伴って来日し、立教学校（聖パウロ学校）で英語を教えた。米国マサチューセッツ州ピッツフィールドにスコットランド出身の商人ジェームズ・メアリーの長男として生まれた彼は、クリスフォード大学を卒業後、母の信仰と祈りにより、76年にナシヨタ神学院に入り、79年の卒業とともに司祭按手を領し、レポートの教会を牧していた。

立教学校は教授陣が整い、80年頃から次第に知名度が高まっていった。この頃、スペンサー哲学や進化論などの輸入思想が官立学校に勢力を得ていくなかで、ウィリアムズ主教はそれに対抗した

教育が急務であると意識するようになった。アメリカ聖公会伝道局に送った1881年度の日本年報において、彼は次のように報じている。

日本の青年層の心を毒しつつある無宗教的影響は、キリスト教に対して偏見を持たせ、仏教の及ぼす僅かの道徳的影響の基礎をも弱めている[現状において]、教会がこの国の教育事業に対して真剣に熱意を注ぐべきことは絶対に必要である。

東京における最大の、最もよく知られているある私立校は、公然とすべての宗教に対し無関心であるとしながら、すべて軽蔑し、事実上キリスト教に対して反抗的であり、スペンサー哲学を最高の福音と説き、またミル・バックル・ハックスリー・ティンダルらを新信仰の使徒と仰いでいる。大学は、数年来キリスト教支持の影響を与える教授たちを解雇し、その後を全く無宗教か、時には反宗教の活動家をもって埋めた。今や英米で教育を受けた若い日本人が外人教師にとって代わりつつある。彼らの中には好意的にキリスト教に傾く人は一人もなく、若干の者はその敵手であることを公言していることは悲しむべき事実である。<sup>6)</sup>

当時の唯物論的な思想、無神論的・無宗教的傾向に支配されつつある日本の高等教育界の動向を嘆じ危機感を覚えたウィリアムズは、この国にキリスト教大学の設立が急務であると論じ、その目的のために優れた教授の派遣と校舎の建設資金の提供を要請した。さらにまた、立教を卒業した者が東京大学に進学して重大な危険に曝されることが予想されることから、すみやかに「よく整備された大学」を建設すべきであると宣教師会議が大多数の賛成で決議したことも併せて報じた。<sup>7)</sup>

当時の日本の知識社会では進化論が紹介され、東京大学で影響力をもっていた。また、かつて自由民権を主張した加藤弘之は東京大学の総理になると、体制イデオログに転向し、天賦人權思想を否定するに至るなど、国家主義が強まり、多くに知識人が反キリスト教的な態度を示すようになった。そうした空気のもと、ウィリアムズは、

科学万能主義・不可知論・懐疑論・功利主義・進化論といった東京大学その他の思潮を強く批判し、日本の青年層をキリスト教の影響下にとらえる必要を力説した。

彼はガーディナーと共に大学設立計画を進め、すでに永代借地権を得ていた東京の築地居留地37番にある約1500平米の土地に、ガーディナーの設計になるゴシック風レンガ造り3階建て校舎の新築に着手した。新校舎が落成し、83年1月には「立教大学校」が開校された。学制を改めて新発足した立教大学校の傍らに、築地1丁目の校舎も移されて舎監室兼食堂となった。初代校長にはガーディナーが就任(91年まで在任)し、豊かな学殖と手腕をウィリアムズに認められた貫が教頭となった。<sup>8)</sup>

大阪にウィリアムズが創立した大阪英和学舎は、ほとんど閉鎖のありさまであったが、ティング(Tyng, Theodosius Stevens 1849.11.26-1927.10.19)が復興に取り組んだ。78年、米国聖公会から派遣されて来日した彼は、大阪で前任のモリス(Arthur R. Morris)を助けて礼拝に奉仕した。ティングは元田作之進、名出保太郎、多川幾造、小林彦五郎ら多くのすぐれた聖公会聖職者を育てた。また大阪英和学舎からは大塚惟明、左乙女豊秋、林虎之助など教育界・実業界の人材が輩出した。彼らはフィッシャーによって大阪バンドと称された。<sup>9)</sup>

しかし、国粹主義と反キリスト教の思潮の高まりの余波を受け、また大阪伝道を開始し学校設立計画をもっていたCMSに校舎を譲るため、大阪英和学舎は廃校に立ち至る。87年3月、東京の立教大学校に吸収合併され、生徒14名は立教に移った。

この学校は、「大学校」と称したわりには小規模な学校であった。生徒数は、ほぼ50人前後であり、多いときで72人、少ない年は26人にすぎなかった。<sup>10)</sup>

立教大学校は、そのモデルをアメリカのカレッジにもとめ、予備科2年、本科4年の高等普通教育を施した。教科書はすべて英書であり、教えられた英語教科書は以下のとおりである。

シル氏文典、バルディーン氏修辭書、ヒル氏修辭書、ウェイントウォース氏代数幾何三角、スチール氏性理、動物、パンス氏万国史、フィッシャー氏万国史、パンス氏合衆国史、エヴェレット氏理科、ガイキ氏地理、ダナ氏地質、グレー氏植物、ギゾー氏文明史、ケログ及リード氏英文学、エリオット及ストラー両氏化学、ロージャー氏経済書、ニューコム及びホルテン両氏天文学、ゼボン氏論理、ウルシー氏万国公法、ブランド氏教会史等なり<sup>11)</sup>

このように、立教大学校の教育内容は、文法・修辭学・論理学・代数幾何学・天文学・音楽を含む、ヨーロッパ中世以来のリベラル・アーツの伝統を色濃く引き継ぐものであった。立教大学校は、アーツ・アンド・サイエンス学部であるといつてよかった。

ウィリアムズがチャプレンとして聖書講義を担当し、校長のガーディナーは英文学を教授した。書記のロー博士が理化学を受け持ち、モリスは会計を、幹事の波多野一は訳読を教えた。ミス・フルベッキは訳読と音楽を教授し、ウードマンは地理を、赤尾戒三は和漢文を、阪本安則は数学を、四谷政偶は体操を教えた。<sup>12)</sup>

学校建築群も築地一帯に拡充整備されていった。37番の本館を囲んで、38番に主教館、26番に立教女学校があり、87年、40番に校長館が新設され、さらに53-56番も入手し、89年には、53番に三一神学校校舎兼寄宿舎、39番に聖三一大聖堂が、翌年に三一神学校本館、その翌年には大聖堂の向かい三一神学校に隣接する54番に三一会館ができた。こうして築地の一角は立教関係の洋館が建ち並び、会館の高塔から鳴り渡るチャイムの音とともに築地名物にかぞえられるようになった。<sup>13)</sup>

立教の創設者ウィリアムズは、80年代の末、自らが設立した学校を離れる。87年2月に日本聖公会の組織を成立させた彼は、89年4月、日本聖公会の第2総会が立教大学校で開かれ、議長として主宰したとき、60歳を迎えていた。禁教下の中国と日本への伝道開始という難事業の道を歩んだウィリアムズは、この機に後進に道を譲って一介の伝

道者として余生を過ごそうと決心し、密かに伝道局に主教職の辞任を申し出ていた。同年10月18日、その承認を得るに伴い、職責上、設立者となっていた立教と三一神学校も退任することとなった。浪々の身となった彼は、以後、一牧者として関西で伝道に従事する。

立教大学校はアメリカのカレッジに倣って運営されていたが、まもなく、学則があまりに外国的であり、また学内行政が外国人の掌中にあるとして、学生たちから改革の声が上がることとなった。<sup>14)</sup>

### 3) 同志社大学の設立構想

新島襄の大学設立運動は、米国からの帰国直前の1874(明治7)年10月9日、アメリカ合衆国ヴァーモント州のラットランドで開催されたアメリカン・ボードの第65回年次総会で彼が訴えた演説に始まる。<sup>15)</sup>4日間にわたる総会の最終日に別れを告げるため演壇に立つ幸運に恵まれた新島は、演説草稿を準備した。日本にキリスト教主義の大学を建設したい旨を訴えた新島の演説は、わずか15分間ほどのものであったが、熱誠にあふれ、新島の恩人であったアルフェウス・ハーディ(Alpheus Hardy)が成功はおぼつかないと予告していたにもかかわらず、たちまちにして5000ドルの寄付金が集められた。<sup>16)</sup>

翌75年3月、在米中に世話になったハーディに宛てた書簡によれば、当時、ミッションは対日資金提供を伝道師の養成機関に限定しようとしていたが、新島は高等教育機関をおこすのでなければ、日本におけるキリスト教の発展は望みがたいとみていた。日本の最も優秀な青年層は、神学や聖書のほかに、なによりも近代的な学術・知識を求めているのであり、彼らの知的渴望を満たすことができなければ、自分たちのもとに留まらずに去るであろうことを新島はよく知っていた。<sup>17)</sup>

以上のような認識を有していた彼は、1879(明治12)年2月、アメリカン・ボードの運営委員会(Prudential Committee)へ長文の書簡を送り、キリスト教主義による大学の設立の必要性を訴えている。ミッションへの意見書の要点は、次のよ

うなものであった。

今や私立の諸学校はもとより官公立の学校も同志社以上に発展しつつある。もし我々が改善の努力を怠るならば、ついには教育界の下層に埋もれて取り残され、最良の学生層を獲得することは出来ないであろう。宣教師たちはあまりに多く聖書を教えようとして、学術の教授を軽視してきたため、全く人気を失ってしまっている。将来有望な青年たちは大いに失望し、同志社を去って東京に赴き、キリスト教の感化のない学校に入学した。最も有為なる青年たちを同志社につなぎ止めるには、キリスト教教育はもとより、よりいっそう高尚かつ専門的な教育を施さねばならない。キリスト教の牧師を養成するのみならず、キリスト教徒の医師や政治家や商人を育成するには、日本に強大なキリスト教主義の大学(University)を設立することが必要であり、それこそがキリスト教の成功の鍵である。<sup>18)</sup>

80年代以降の日本における教育の制度化の進行を予測して、危機感と焦燥感を抱いていた新島は、日本における大学設立は時宜に適しているとして、新約的精神に満ち、該博な知識に富み、強固な人格をそなえ、環境に順応できる融通性をもった優秀な人物の派遣をアメリカン・ボードに対して要請している。

神戸に伝道学校を開いていたアメリカン・ボード派遣の宣教師デイヴィス(J. D. Davis)も、単なる神学校ではなく、初めから新時代に対応できる大学程度のキリスト教系の教育機関の設立をめざしており、新島と同様な見解をもっていた。

直ちに完全な学校を開設することができなければ、我々の周囲の、また我々が繋ぎ留めているキリスト者青年の大部分は、我々から離れ去ってしまう。それ以上に官立学校の唯物主義との闘いのために、我々はキリスト教大学を持ち、牧師を養成しなければ、伝道そのものが成功を取めることはできない。それが我々の唯一の希望であり、我々はまずそれに直面すべきである。<sup>19)</sup>

ここには、「官立学校の唯物主義」に対するイデオロギー的な対抗意識が明瞭にうかがえる。こ

うして、新島とデイヴィスは提携して同志社大学の設立へ向けて努力する。

しかし、多くの宣教師たちが新島の構想に協力的であったわけではない。宣教師レビット (H. H. Leavitt) などは、日本のクリスチャンが財政的に宣教師やアメリカン・ボードに頼りすぎることから批判していた。ジャパン・ミッションの宣教師たちは多くの報告書をアメリカン・ボードのクラーク (N. G. Clark) 総主事に宛てて送っているが、80年代の初めまで、彼らは報告書の中で Doshisha という語を用いていない。Training School や Kyoto Training School あるいは Training School of the Mission で通しており、83年になってはじめて Doshisha Training School という表現を用い始め、88年に至って Doshisha という表現に落ち着く。すなわち、宣教師たちは長く同志社を新島の学校としてではなく、ジャパン・ミッションの伝道師養成学校であると理解していたと考えられる。大学を設立しようとする新島と宣教師たちとの間には相克があった。<sup>20)</sup>

1875 (明治8) 年に同志社英学校を設けて将来の布石とした新島は、その後、大学レベルの学校をもたなければ自分たちの仕事は成功しないと確信し、たびたび演説会を開いて理解を求めた。82年に「同志社大学設立之主意之骨案」を書き、翌年には「同志社大学設立旨趣」をまとめて全13頁の冊子に印刷して有力者に頒布し、大学設立の賛同と協力を求めた。84年1月、新島の自宅で仮発起人会が開かれ、旨趣書に法学部設立とあったのを取り消し、文学部設立に改め、17名の発起人が決定された。

しかし新島は、キリスト教の伝道と同志社英学校の校長職および大学設立のための募金運動によって過労に陥り、84 (明治17) 年4月から翌年にかけて、静養と募金を兼ねて2回目の欧米旅行に出かけた。

彼の留守中、彼が準備していた「明治専門学校設立旨趣」と題する草稿に「明治専門学校創立規則」を付し、全16頁の小冊子が印刷され、頒布された。そのなかで新島は、東洋の不振は自由とキリスト教道徳の欠如に因ると指摘している。ヨー

ロッパ諸国の文運の発展は、自由の拡張と学問の発達と政治の進歩と道義の能力によるが、これらはキリスト教の道徳を主として学術を攻究したことによるものであるとし、西洋の学風・知育を模倣するのみにとどまり、その根底にある道徳を学ぼうとしない日本の現状を批判、西洋の道徳を基本として人文の自由を発育することを提言している。<sup>21)</sup>

この創立規則によれば、1890 (明治23) 年に予定された国会開設の年を期して、京都に「明治専門学校」と称する大学を設立し、内外の博士・学士を雇い入れ、「智徳並進ノ主義」に基づき諸学科を専修せしめることがめざされた。まず文学部をつくり、文学・歴史・哲学・政治・経済などを講義し、その後、法学部・理学部・医学部を設立して総合大学とする計画であった。<sup>22)</sup>

近代国家として日本が名実共にスタートする年に、その近代国家を担うべき人物の養成をめざす大学づくりであった。85年12月に帰国してからの新島は、いよいよ社会的名声を高めていった。

翌年9月、上長者町烏丸西入にあったデイヴィス邸に同志社病院の仮診療所を開き、京都看病婦学校の授業を開始した。これらは将来の医学部への発展を意図した布石であった。87年11月に同志社病院と付属京都看病婦学校の開校式が挙行され、翌88年には普通学部と神学部と予備学部が設立され、同志社の組織は拡大していった。文部省の第16年報 (明治21年度) において、同志社は慶応義塾と肩を並べて記述されるまでに発展した。<sup>23)</sup>

88年から89年にかけて、新島は同志社の学生たちのことを心にかけてながら、病軀をおして東奔西走し、各地で演説会を開き、大学設立を京都や東京の名士たちに訴え続けた。

88年4月、京都知恩院の大広間で開催された明治専門学校設立のための演説会では、府知事・府会議員・区長・戸長・会社頭取・医師・資産家など、府下650余名の来賓を前に、一国の開明を進めるために大学が必要であり、その大学は「学者芸人ヲ作り出スノミナラズ、実ニ一國ノ元氣トナリ、精神トナリ、又柱石トナリ得ベキ人物」を養成しなければならないと訴えかけ、私立大学を創



設することが畢生の志願であることを吐露した。<sup>24)</sup>

陸奥宗光の斡旋により、前外務大臣の井上馨は、88年4月22日、新島のために自邸に一夕の宴を張って、顯官富豪を集めて好意を示した。明治専門学校設立に関するその集會に出席したのは、青木周蔵、野村靖、渋沢栄一、原六郎、益田孝、沖守固（神奈川県知事）ら、外交官・財界人・政治家であった。同年7月19日には、大隈重信外務大臣官邸において、明治専門学校設立についての相談會が開かれ、大隈、井上、渋沢、益田のほか、平沼專造、岩崎弥之助・久弥、大倉喜八郎、田中平八が出席し、約3万円の寄付金が集められた。<sup>25)</sup>

時代の空気は新島にとって順風であり、キリスト教主義の大学を設立するには好機到来といえた。陸奥、井上、大隈、渋沢、原といった当時の有力者が、キリスト教主義の教育を主張する新島の大学設立計画を賛助するにおよび、彼は公然たる社会の信用を得るにいたった。

新島は、88年10月、弟子の徳富猪一郎（蘇峰）にそれまでの関係資料を提供して、大学設立趣意書の起草を依託した。その前月に開かれた同志社社員會で、従来用いられていた「明治専門学校」の名称を「同志社大学」と改称することが決定された（半年前に新島宛の書簡で徳富が提案した案の通りとなった）。徳富は新島の意を体して「同志社大学設立の旨意」を書き上げ、同年11月7日、新島はこれを全国の主要新聞・雑誌<sup>26)</sup>に発表した。この内容は大きな反響を呼び、キリスト教界はもとより、陸海軍人・警察官・労働者・学生・受刑者などから広く義援金が寄せられた。

新島の観るところによれば、欧州文明は、その現象は繁多であっても、概論すればキリスト教の文明であり、キリスト教主義は血液のように万事万物の中にみな入っている。ところが、わが国ではただ外形の文明をとるにとどまり、わが国の青年は西洋の文学や科学を修めているが、その教育には帰着するところがなく、さまよっている。かかる事態を開閉するため、活きたキリスト教をもって大学設立の大任に当たろうというのである。その目的と理念に関しては、以下のように宣言して

いる。

其目的とする所は、独り普通の英学を教授するのみならず、其徳性を涵養し、其品行を高尙ならしめ、其精神を正大ならしめんことを勉め、独り技芸才能ある人物を教育するに止まらず、所謂良心を手腕に運用するの人物を出さん事を勉めたりき、而して斯くの如き教育は、決して一方に偏したる智育にて達し得可き者に非ず、又既に人心を支配するの能力を失いたる儒教主義の能くす可き所に非ず、唯上帝を信じ、真理を愛し、人情を敦くする基督教主義の道德に存することを信じ、基督教主義をもって徳育の根本と為せり、吾人が世の教育家と其趣を異にしたるも茲に在り。<sup>27)</sup>

たんに「技芸才能ある人物」にとどまらず、「良心を手腕に運用するの人物」を育てること、そうした人物をキリスト教の信仰にねざした教養教育によって養成することがうたわれた。また、88年9月に制定された「同志社通則」36条中の第1章総則「同志社綱領」の第3条にも、「本社ハ基督教ヲ以テ徳育ノ基本トス」と明言された。<sup>28)</sup>

同志社の教育理念の核心を語るものといえる、こうした宣言は、キリスト教主義の徳育という点において、1890（明治23）年の教育勅語にいたる儒教主義的な徳育原理、ひいては天皇中心の徳育原理とするどく対立する思想である。それは、忠孝を基調に説かれる道德ではないとともに、また他方、良心を育てる徳育を教育の根本理念と考えるという立場において、啓蒙期の主知主義的な教育理念にも対立するものであった。<sup>29)</sup>

同志社大学を設立することにより、新島は「独自一己の見識を備へ、仰いて天に愧ず、俯して地に愧ず、自ら自個の手腕を勞して、自個の運命を作為するが如き人物」<sup>30)</sup>「自治自立の人民」を育成したいと願った。また、立憲政体を維持するには「智識あり、品行あり、自から立ち、自から治むるの人民」でなければ不可能であるとし、「果たして然らば今日に於て、此の大学を設立するハ、実に国家百年の大計に非ざるなきを得んや」と訴えた。<sup>31)</sup>

しかしキリスト教を徳育の基本としたことは、「同志社大学設立の旨意」の中に「而して同志社が数年荆棘の下に埋没したるも亦茲に在り」とあるように、文字どおり茨の道を行く選択でもあった。

新島の大学設立構想は、キリスト教の教勢拡大のための手段ではなく、伝道師の養成を目的とするものでもなかった。「吾人は基督教を拡張せんが為に大学を設立するに非ず、唯基督教主義は実は我が青年の精神と品行とを陶冶する活力あることを信じ、此の主義を教育に適用し、更に此の主義を以て陶冶する人物を養成せんと欲するのみ。」という立場を採った。学問の世界と信仰の世界を安直に結びつけることを退けたものといえよう。<sup>32)</sup>

すでに明治政府は、86年に、「帝国大学ハ国家ノ須要ニ応ズル學術技芸ヲ教授シ及其蘊奥ヲ攷究スルヲ以テ目的トス」(帝国大学令第1条)と規定された総合大学を国家の威信をかけて創出していた。「帝国」を冠して国家主義の立場から設けられたこの官立大学に対して、新島は私立大学を設立することの意義を次のように主張した。

吾人は教育の事業を挙げて、悉く皆行政府の手に一任するの甚だ得策なるを信ぜず、苟も国民たる者が、自家の子弟を教育するは、是国民の義務にして、決して避く可き者に非ざるを信ず、而して国民が自ら手を教育の業に下して、之を為す時に於いては、独り其国民たるの義務を達するのみならず、其仕事は懇切に、廉価に、活発に、周到に行き届くは、我れ自から我事を為すの原則に於いて決して疑ふ可き事に非ず。…(中略)…吾人は日本の高等教育に於て唯た一の帝国大学に依頼して止むべき者に非ざるを信ず、思うに我が政府が帝国大学を設立したる所以んは、人民に率先して其模範を示したる事ならん、思ふに日本帝国の大学は悉く政府の手に於て設立せんとの事には非ざる可し、吾人は実に今日に於て傍観坐視するを得んや、吾人は政府の手に拠って設立する大学の実に有益なるを疑はず、然れども人民の手に拠って設立する大学

の、実に大なる感化を国民に及ぼすことを信ず、素より資金の高より云ひ、制度の完備したる所より云へば、私立は官立に比較し得可き者に非ざる可し、然れども其生徒の独自一己の氣象を發揮し、自治自立の人民を養成するに至っては、是私立大学特性の長所たるを信ぜずんば非ず、教育は實に一国の一大事業なり、此の一大事業を国民が無頓着にも、無気力にも、唯政府の手にのみ任せ置くは、依頼心の最も甚だしき者にして、吾人が實に浩嘆止む能はざる所なり。<sup>33)</sup>

新島は、政府による唯一の帝国大学の設立の意義を否定しないが、あくまでも民間主導による大学づくりがもつ意義と重要性を説いてうまなかった。彼は、高等教育を政府の手に任せ、国民が帝国大学だけに依頼するのをよしとしなかった。

海外に眼を向けると、アメリカ人が移住直後から開設したハーバード大学がいまや13万巻をこえる書物を所蔵する有力な大学に発展したことに注目した新島は、アメリカ人が「自治の元気に富む」のも、こうした私立大学の存在によるところが大きいと観察していた。また日本の足利時代にあたるころから大学を開設していたイタリアやドイツにおける高等教育の活況にもふれながら、「自治自立の人民」を養成するという福沢諭吉や小野梓らと共通の目標をかかげ、私立大学が自ら特性を發揮することによって、その目標は達成できるとみていた。<sup>34)</sup>

いうなれば、国家権力による高等教育の独占に対して、新島は挑戦状をたたきつける気概を示したともいえるのである。

新島が理想とする大学は、ヨーロッパやアメリカの歴史のなかで培われてきたリベラル・エデュケーション(自由教育)を重視するものであった。リベラル・アーツ・カレッジとしては、彼が学んだアマースト・カレッジが理想として脳裏に焼き付いていたことは想像に難くない。<sup>35)</sup>学生に科学や文学の知識を学ばせるにとどまらず、加えて、そうした知識を運用する品行と精神を養成しようとする教育であった。<sup>36)</sup>

一国の維持は「二三英雄の力」によってではな

く、「教育あり、智識あり、品行ある人民」の力によらなければならず、それらの人民は一国の良心ともいうべき人びとであると新島は考えていた。そうした一国の良心ともいうべき人びとを養成しようと願う彼にとって、「大学設立のごときは実に一国百年の大計よりして止む可からざる事業」<sup>37)</sup>にほかならなかつた。

かかる情熱に燃えていた新島であったが、彼の身体は病魔におかされていた。ひどい心臓発作や胃腸の痛みに襲われていた彼は、1889年11月、最後の病床につくことを余儀なくされた。病衰いちじるしかったものの、なお気力にあふれていた新島であったが、90年1月17日、重体に陥り、腹膜炎と診断された。神奈川県大磯の宿舎で、21日、危篤に陥った新島襄は、妻と徳富猪一郎、小崎弘道を枕辺に呼び、2時間にわたって同志社の将来に関する遺言を徳富に筆記させた。

同志社の前途については、「基督教の徳化、文学政治等の隆興、学芸の進歩」の三者があいともない、あいまって行すべきこと、教育の目的については、専攻分野にかかわらず、「皆精神活力あり真誠の自由を愛し」、国につくす人物を養成するようつとめるべきこと、生徒を「鄭重」に取り扱うべきこと、「てきとう不羈なる書生ヲ圧束」せず、つとめてその本性に従い、これを「順導し以て天下の人物」を養成すべきこと等、注意を促し、また、学校が盛んになるに従い機械的に流れる恐れがあることを戒めた。<sup>38)</sup>

病のため事業半ばにして倒れた新島は、同志社大学の完成を見ることはおろか、国会開設祝賀にあわせた設立着手さえできぬまま、1890(明治23)年1月23日、47歳の若さで永眠する。同志社の維持経営、キリスト教の伝道、キリスト教界の組合教会と一致教会との合併問題への批判運動に心身をすり減らしての客死であった。

新島襄の死は、欧化主義の時代におけるキリスト教教育の隆盛の終焉を象徴するものでもあったのである。

## 註

- 1) この頃の新島や外山の議論については、次の論考が参考になる。平塚益徳「日本基督教主義教育文化史」、平塚博士記念事業会編『平塚益徳著作集Ⅰ 日本教育史』(教育開発研究所、1985年)所収、50-55頁。加藤は『真政大意』(1869年)において天賦人權説を紹介したが、変節していき、数年後にはフリードリヒ大王をたたえる『国体新論』(1874年)を執筆、1881年に東京大学の初代総理となり、翌年、天賦人權説を批判する『人權新説』を刊行した。
- 2) 永井道雄『日本の大学』中央公論社(中公新書61)、1965年、30頁。
- 3) 麻生誠『大学と人材養成』中央公論社(中公新書221)、1970年、108-9頁。麻生は、学農社を、理工・科学系の私立高等教育の未熟児と位置づけている。
- 4) キリスト教学校教育同盟『日本キリスト教教育史-思潮編-』創文社、1993年、124頁。
- 5) この前後の記述は次の文献による。鷲山第三郎『明治学院五十年史』1927年。『明治学院百年史』明治学院、1977年。横浜プロテスタント史研究会編『横浜キリスト教文化史』有隣堂、1991年、56頁。
- 6) The Spirit of Missions, edited for the Board of Missions of the Protestant Episcopal Church, Vol. 46, Nov-Dec. 1881, P. 528 立教学院百年史編纂委員会編『立教学院百年史』立教学院刊、1974年、173頁。
- 7) 前掲書、同頁。なお、同書では1880年代前半についての記述のなかで、大学を「帝国大学」と解して本文でも用い、英文翻訳においても訳出しているが、帝国大学は1886年の設立であり、誤解であることは明かである。ここでは、その前身の「東京大学」のことである。
- 8) 『立教学院百年史』、前掲、173-4頁。なお、同書には、「大学校」の起点に関する、若干の異説と、それに対する反論が記載されている。
- 9) G. M. Fisher "Creative Forces in Japan" London, 1923
- 10) ガーディナーがアメリカ伝道局へ送った学事報告によれば、86年7月始業の際、生徒数は48名(内16名は新生、残り32名が在来生)で、12月の学期試験前には60名となったが、試験に落第し学力不足のために退校した者が22名あった。翌年1月に8名が、2月に3名が入学し、2学期には47名となった。3月には大阪英和学舎から14名の生徒が

- 転向してきたため、4月の3学期には総数72名(内45名が自給生)に増えた。7月の学年試験に応じた者は52名あったが、14名が落第、3名は条件付きの合格であった。89年9月の新学期には、新入生が5名にもみたぬありさまで、90年1月の報告によれば、在校生は激減して26名に過ぎなかった。元田作之進『明治三十四年三月調 立教学院歴史』立教学院, 1901年, 3-4頁。立教学院百二十五年史編纂委員会『立教学院百二十五年史 資料編第1巻』(立教学院, 1996年)所収, 34頁。The Spirit of Missions, edited for the Board of Missions of the Protestant Episcopal Church, Vol. 56, Feb. 1891, P. 62『立教学院百年史』, 前掲, 187頁。
- 11) 『立教学院歴史』, 前掲書所収, 34頁。
  - 12) 『立教学院歴史』, 5-6頁。『立教学院百年史』(前掲, 187頁)および『立教学院百二十五年史 資料編第1巻』(前掲, 34頁)所収。また、下村泰大編輯・和田民之助増補『東京留学案内』春陽堂(1885年)に立教大学の学科目・テキストが確認できる(『立教学院百二十五年史資料編第1巻』, 前掲, 785-5頁)。
  - 13) 『立教学院百年史』, 前掲, 188-9頁。
  - 14) 前掲書。189頁。
  - 15) 同志社大学の設立へ向けた新島の努力に関しては、井上勝也『新島襄 人と思想』(晃洋書房, 1990年)の第5章「新島襄の大学設立運動」が詳しい。
  - 16) 新島襄の熱烈な愛国心に対して、医学博士や前州知事の1000ドルをはじめ、農夫や老婦人の2ドルまで、さまざまな階層の人びとの善意が集まった。社史々料編集所編『同志社九十年小史』同志社, 1965年, 131-2頁。なお、この年次総会と新島襄の演説についての詳細な研究には次の論考がある。オーテス・ケーリ(Otis CARY)「ラットランドと新島襄と同志社」, 北垣宗治編『新島襄の世界ー永眠百年の時点から』晃洋書房, 1990年, 199-220頁。
  - 17) 1875年3月, ハーディ宛書簡 Alphens S. Hardy, The Life and Letters of Joseph Hardy Neeshima, Boston 1891, p. 195 訳文は『同志社五十年史』(同志社, 1930年, 47頁)を参考にした。
  - 18) 井上勝也『新島襄 人と思想』(107-8頁)の現代語訳および『同志社五十年史』(69頁)の漢語的な訳文の双方を参考とした。
  - 19) J. M. Davis, Soldier Missionary, A Biography of Rev. Jerome D. Davis, Boston 1916, p. 135『立教学院百年史』(172頁)より訳文引用。
  - 20) 井上勝也, 前掲書, 243頁。
  - 21) 「明治専門学校設立旨趣」新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』同朋舎出版, 第1巻, 1989年, 98頁。
  - 22) 同上書, 99-100頁。
  - 23) 平塚益徳「日本基督教主義教育文化史」, 前掲書, 68頁。平塚博士はまた、当時の同志社の教育・研究が決して高いレベルのものではなかったことを論証している(70-72頁)。
  - 24) 「専門学校ヲ設立スルノ旨趣」, 『新島襄全集』第1巻, 前掲, 124-6頁。
  - 25) 井上勝也, 前掲書, 114-5頁。社史々料編集所編『同志社九十年小史』(同志社, 1965年, 133-4頁)によれば、新島は、陸奥宗光に相談し、井上馨邸で数人の友人と会し、意中を吐露したが、席上昏倒し、四肢が冷却したとある。彼の計画を支援して、井上馨、大隈重信、岩崎弥之助、岩崎久弥、青木周蔵、渋沢栄一、大倉喜八郎、益田孝らから寄付金が集められた。
  - 26) 『報知新聞』, 『毎日新聞』, 『朝野新聞』, 『東京電報』, 『公論新報』, 『改進黨新聞』, 『東京朝日新聞』, 『絵入朝野新聞』, 『基督教新聞』, 『東京経済雑誌』, 『東京与論新誌』, 『国民之友』である。また英訳されて、アメリカン・ボードの機関誌である *Missionary Herald* (1889年3月号)にも掲載された。井上勝也, 前掲書, 116頁。
  - 27) 「同志社大学設立の旨意」『新島襄全集』第1巻, 前掲, 132頁。
  - 28) 『同志社九十年小史』, 前掲, 5頁。
  - 29) 浜田陽太郎・石川松太郎・寺崎昌男編『近代日本教育の記録 上』日本放送出版協会, 1978年, 129頁。
  - 30) 「同志社大学設立の旨意」前掲書, 138頁。
  - 31) 前掲書, 137-140頁。
  - 32) 『同志社九十年小史』, 前掲, 296頁。
  - 33) 「同志社大学設立の旨意」前掲書, 139頁。
  - 34) 山住正己『日本教育小史ー近・現代ー』岩波書店(岩波新書363), 1987年, 69-70頁。
  - 35) 井上勝也, 前掲書, 107頁。
  - 36) 「同志社大学設立の旨意」前掲書, 139頁。
  - 37) 前掲書, 140頁。
  - 38) 「遺言」, 『新島襄全集』第4巻, 前掲, 403頁。